

氏 名（本籍地）	澤 田 容 子（千葉県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
報告・学位記番号	甲第391号（甲文第46号）
学位記授与の日付	平成28年3月25日
学位記授与の要件	本学学位規則第3条第1項該当
学 位 論 文 題 目	アルダナーリーシュヴァラ研究 ープラナーナ聖典における創造神話の構造分析ー
論 文 審 査 委 員	主査 客員教授 Ph.D. 宮 本 久 義
	副査 教授 博士（文学） 橋 本 泰 元
	副査 教授 沼 田 一 郎

【論文審査】

澤田容子氏の論文題目にある「アルダナーリーシュヴァラ」とは、ヒンドゥー教三大神の一柱であるシヴァ神の相の一つで、右半身が男性（シヴァ神）、左半身が女性（女神）という両性具有の特徴を持つ神である。澤田氏の研究課題は、このアルダナーリーシュヴァラが関与する生類の創造神話を多くの文献の中から収集し、それらの神話の構造分析を通じて、それらがどのように形成され、変遷をとげたかを解明することである。

古代インドでは前1200年頃に編纂された『リグ・ヴェーダ』に見られるように、インドラ神を中心にした神話や儀礼体系を持つバラモン教が信仰されていたが、前2世紀前後にはバラモン教とは性格を異にするヒンドゥー教が、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、シヴァ神の三柱を中心とする多神教として次第に形成されてきた。ヒンドゥー教の世界創造神話はバラモン教のものを踏襲したものが多いが、生類の創造神話はバラモン教時代のものを基礎としつつも新たな展開が見られる。澤田氏はその変遷をまず2段階に分け、第1段階のバラモン教時代に見られる男女に分裂し創造する神話は比較的簡略に取り上げ、第2段階のヒンドゥー教隆盛以降のブラフマー神による男女分裂の創造神話（以下、ブラフマー創造神話と略す）、およびブラフマー創造神話に近似したアルダナーリーシュヴァラによる男女分裂の創造神話（以下、アルダナーリーシュヴァラ創造神話と略す）を本論文の考察対象とした。さらに両神話の構造を構成要素別に比較分析し、全体的な神話の流れも比較することで、一柱の神が男女に分裂して創造を行なう神話の変遷と、またその変遷過程におけるアルダナーリーシュヴァラの成立について整合性のある解釈を提示しようと試みた。

本論文全体の構成は以下の通りである。

第1部 本編

序 論

第1節 アルダナーリーシュヴァラについて

第2節 プラーナ聖典について

第3節 本論文の趣旨

第1章 ブラフマー創造神話

第1節 ブラフマー創造神話の構成要素

第2節 神話全体の流れ

第3節 小結

第2章 アルダナーリーシュヴァラ創造神話

第1節 アルダナーリーシュヴァラ創造神話の構成要素

第2節 神話全体の流れ

第3節 小結

第3章 ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の比較

第1節 構成要素

第2節 神話全体の流れの比較

第3節 小結

結 論

第2部 資料編

論文の概要は、以下の通りである。

序論第1節「アルダナーリーシュヴァラについて」では、本論文で論じられるアルダナーリーシュヴァラ神について概説している。アルダナーリーシュヴァラという語は「半身が女性であるシヴァ神」という意味であるが、澤田氏によれば、アルダナーリーシュヴァラが含意する男女によってなされる創造や生産の意味が、発展的に夫婦愛や性愛、世界との一体化なども象徴するようになったという。また、インド神話の研究者オフラハティーや図像学者のクラムリッシュ等の先行研究を検討し、それらが文献学的に十分な裏付けがなされていないことを指摘している。第2節「プラーナ聖典について」は、本論文で扱う神話の出典についての概説である。「プラーナ」とは、ヒンドゥー教の神話や祭祀、聖地の縁起や巡礼作法などについて説かれた聖典群の総称で、5世紀頃から約1000年以上の長きにわたって数多く作成された。澤田氏が本論文で使用したのは、『アグニ・プラーナ』、『バーガヴァタ・プラーナ』、『ブラフマ・プラーナ』、『ブラフマーンダ・プラーナ』、『カーリカー・プラーナ』、『クールマ・プラーナ』、『リンガ・プラーナ』、『マールカンデーヤ・プラーナ』、『マツヤ・プラーナ』、『パドマ・プラーナ』、『シヴァ・プラーナ』、『スカンダ・

プラーナ』、『ヴァラーハ・プラーナ』、『ヴァーユ・プラーナ』、『ヴィシュヌ・プラーナ』という15のプラーナ聖典と、それらに先行する『マヌ法典』（前200年～後200年）である。第3節「本論文の趣旨」では、プラーナ聖典に先行するヴェーダ聖典、ブラーフマナ聖典、ウパニシャッド聖典に男女に分裂する創造者のモチーフが見られるが、本論文ではそれ以降に登場する「分裂前も分裂後も1人の人間の姿を取る男女に分裂する創造者」の神話の構造分析を行うとする。この節の前半の史的展開を概観した部分はやや先行研究に頼った感があり、独自の見解が俟たれるところである。

第1章「ブラフマー創造神話」では、プラーナ聖典と『マヌ法典』に見られる17箇所のブラフマー創造神話の構造を分析している。澤田氏は、「何かしらの機能やテーマなどの意味を持っている、最小単位の文章である神話素（レヴィ・ストロース提唱）や複数の神話素を合わせた文章の機能や意味などを抜粋、もしくは要約したもの」を神話の構成要素と定義した上で、第1節では、まず17の神話に見られる構成要素を以下の通り指定した。

A. 発端：ブラフマー神による創造行為、B. 分裂：ブラフマー神が半身により女性に、半身により男性へと分裂する、C. シャタルーパーによる苦行、D. マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦関係になる、E. マヌとシャタルーパーの子供たち、F. その他の者たちの創造、G. サーンキヤ・ヨーガ哲学に関する記述

第2節では、これらの構成要素をそれぞれの神話の流れに沿って配置し、神話全体の構造を分析した結果、ブラフマー創造神話の全体的な構造は、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow E$ という流れの前後や途中に構成要素F、Gが点在するという1つのパターンを持つ可能性を提示した。さらに詳細な比較検討の結果、これら17のブラフマー創造神話は、同一の神話のヴァリエーションである可能性が高いことが示された。

第2章では、第1章と同様の方法を用いて、第1節でプラーナ聖典に見られる16箇所のアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構造を分析している。構成要素は以下の通りである。

A. 発端：ブラフマー神による創造行為、C. シャタルーパーによる苦行、D. マヌとシャタルーパーに関する記述：マヌとシャタルーパーが夫婦関係になる、E. マヌとシャタルーパーの子供たち、F. その他の者たちの創造、G. サーンキヤ・ヨーガ哲学的記述、H. 創造の過程でブラフマー神が怒る、I. アルダナーリーシュヴァラの出現、J. アルダナーリーシュヴァラが男女に分裂する過程、K. 男性部分、L. 女性部分、M. 仕事を担う、N. ダクシャの娘、O. スターヌに関する記述、P. ルドラの説明

第2節において神話全体の構造を分析した結果、アルダナーリーシュヴァラ創造神話にも、 $A \rightarrow I \rightarrow J \rightarrow K \rightarrow L$ という1つのパターンが示せるという。これら16の神話は1つ

の基本形とその基本形にブラフマー創造神話の構成要素が混在した1パターン、及び分裂した女性半身が女神になる2パターンの計3パターンの変化形が識別できるとする。そして、この最後の2パターンが出現した段階で、男女両性具有の状態にあるシヴァ神と定義し得るアルダナーリーシュヴァラという神格が確立したとする。

第3章第1節では、ブラフマー創造神話とアルダナーリーシュヴァラ創造神話の構造を詳細に比較し、ブラフマー創造神話がアルダナーリーシュヴァラ創造神話より先に作られた可能性が高いと結論する。第2節では、両創造神話の全体的構造の比較から、元来同一の神話のヴァリエーションである蓋然性が高いことを指摘する。さらに、第1章と第2章で導き出した神話全体の流れの5パターンを比較し、それらが作られた順序を次のように推論する。すなわち、①ブラフマー創造神話の基本形 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow E$ 、②アルダナーリーシュヴァラ創造神話の基本形 $A \rightarrow I \rightarrow J \rightarrow K \rightarrow L$ 、③アルダナーリーシュヴァラ創造神話の変化形1（ブラフマー創造神話が混在している形） $A \rightarrow I \rightarrow J \rightarrow K \rightarrow L \rightarrow M1 \rightarrow C \rightarrow D1 \rightarrow E1$ 、④アルダナーリーシュヴァラ創造神話の変化形2（女性部分が女神になる形） $A \rightarrow I \rightarrow J \rightarrow K \rightarrow L1$ 、⑤アルダナーリーシュヴァラ創造神話の変化形3（女性部分がダクシャの娘という女神になる形） $A \rightarrow I \rightarrow J \rightarrow K \rightarrow L2 \rightarrow N$ という順序で成立したと考える。

澤田氏が結論として考える具体的な変遷は次のようなものである。元来、ブラフマー神は創造神であったが、自分自身を男女に分裂し、その両者が夫婦となって子孫を増やすという生類創造の形の神話が語られるようになった。それと同時にルドラ（シヴァ神の別名）の誕生譚もよく知られるようになっていた。そのような中、何らかの理由でブラフマー神の男女に分裂・合体して創造する役割をルドラが引き受けるようになった。その後、ルドラにはシヴァ神の化身という性格が強く表れるようになり、分裂した半身の女性部分にもシヴァ神の配偶神としての性格が付加されるようになる。これがアルダナーリーシュヴァラおよびその神話の確立であると推論する。ヒンドゥー教成立後の早い段階からブラフマー崇拜が衰滅するのはよく知られた事実であるが、アルダナーリーシュヴァラ神話の変遷の中にその兆候を発見した功績は大である。

論文末には「資料編」として、本論文で扱われた17のプラーナ聖典における33箇所の創造神話だけでなく、澤田氏が収集したアルダナーリーシュヴァラ関連の記述の訳註が全て掲載されている。研究者にとって本論文の論述を検証する際の基礎資料となるとともに、さらなる研究の便宜を提供するものとなっている。

【審査結果】

本論文は、ヒンドゥー教の生類創造神話、特にアルダナーリーシュヴァラ神話に焦点を当て、その構造分析を通じて神話の変遷過程の解明を試みたものである。上に見てきたように、アルダナーリーシュヴァラ創造神話はブラフマー創造神話とオーバーラップしてお

り、神話の表面的な筋だけを検討しても両神話の成立の先後関係を明らかにするのは容易ではない。そのこともあってか先行研究が極端に少ない分野である。また、澤田氏が本論文で扱ったサンスクリット原典には多くの不備が見られ、さらに今日まで和訳が無く、英訳を参照しても解釈できないところも多々あった。そのような困難な状況の中で、根気よく研究対象に立ち向かい、かなり説得力のある解釈を示すことができた。アルダナーリーシュヴァラ神には図像や神像が少数ではあるが残されているので、今後それらの研究も進めることができれば、ヒンドゥー教の宗教思想史研究に大いに寄与できると思う。

以上見てきたように、澤田氏の論文はヒンドゥー教思想と信仰の史的展開の研究を大きく前進させるものと高く評価できる。また、文学研究科（仏教学専攻）の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であると認められる。従って、所定の試験結果と論文評価に基づき、本審査委員会は全員一致をもって澤田容子氏の博士学位請求論文は、本学博士学位を授与するに相応しいものと判断する。